

令和2年度事後評価 総合評価 結果

令和2年6月26日  
研究評価委員会

課題名	期間	研究代表者 (所属)	総合評価	研究評価委員会 総合コメント
原子力事故時における近隣住民の確実な初期内部被ばく線量の把握に向けた包括的個人内部被ばくモニタリングの確立	平成29年度～ 令和元年度	栗原 治 (量子科学技術研究開発機構)	B	研究論文の業績及び費用対効果が低いと思われるが、技術的には当初目標である「各世代に対応した簡易甲状腺モニターの開発」を達成したと判断する。原子力事故後に実際に適用するためには、乳幼児に対する注意点など、より詳細かつ具体的な取扱マニュアルの改訂及びモニターの保守を含めた維持管理体制の整備が必要である。
事故等緊急時における内部被ばく線量迅速評価法の開発に関する研究	平成29年度～ 令和元年度	谷村 嘉彦 (日本原子力研究開発機構)	B	原子力事故後の高線量率環境においても適用可能な可搬型甲状腺モニター及び線量評価法の開発という目標は達成したと判断する。ただし、長時間じっとしてられない乳幼児等への対応を含め、モニタリング対象者の視点に立ったマニュアルの作成、集中配備場所から避難所への可搬型モニターの輸送など、運用上の課題の検討が望まれる。
環境モニタリング線量計の現地校正に関する研究	平成30年度～ 令和元年度	黒澤 忠弘 (産業技術総合研究所)	B	高バックグラウンド環境下での線量計校正に要する時間を大幅に短縮できたことは評価できる。研究論文としての公表、技術移転及びISOやJIS規格への取入れ、従来法との組合せを含めた一般的活用に向けた提言など、今後の展開に期待したい。

放射線業務従事者に対する健康診断のあり方に関する検討	平成 30 年度～ 令和元年度	山本 尚幸 (原子力安全研究 協会)	B	長年問題とされてきた放射線業務従事者に対する健康診断の取扱いについて、多数の関係機関に対するアンケート・ヒアリング調査によって実態把握と課題整理を行ったことは評価できる。この段階にとどまらず、問題提起や規制当局への提言まで踏み込むことが望まれる。
染色体線量評価手法の標準化に向けた画像解析技術に関する調査研究	平成 30 年度～ 令和元年度	数藤 由美子 (量子科学技術研 究開発機構)	A	AI の深層学習の手法を適用して染色体画像の自動判別を行うという新しい試みであり、迅速な線量評価の可能性を示した成果は高く評価できる。民間の検査施設への普及や今回対象とした範囲(2Gy 以上)より低い線量の評価等、適用拡大に向けた今後の展開に期待する。
円滑な規制運用のための水晶体の放射線防護に係るガイドラインの作成	令和元年度	横山 須美 (藤田医科大学)	B	水晶体線量のモニタリングについて、その位置付けを明確化した上で具体的な例題を提示するなど、理解しやすい分野横断型ガイドラインをまとめた意義は大きい。ただし、迅速な対応が必要となることが予想される医療分野については、現場での有効性の観点を加えたブラッシュアップが望まれる。

\* 評価基準： A: 非常に有用な成果が得られた、B: 有用な成果が得られた、C: 限定的ではあるが有用な成果が得られた、  
D: 有用な成果が得られなかった